

統一した心不全指導へ向けての第一歩

～情報の取り方やチェックリストを見直してスタッフの意識はどう変わったか～

4階東病棟 ○井上理沙 平田沙希 三苫可奈 是松由加里 内田ひろみ

【目的】

朝倉医療圏の65歳以上の高齢化率は31.0%(全国平均26.6%)と高く、A病院B病棟も入院患者の平均年齢は78.8歳と高い。B病棟は循環器病棟であり、心疾患の患者が占めている。その中でも心不全は慢性疾患であり、自宅での生活習慣が病態を悪化させる要因となるため、B病棟でも以前より心不全指導を行っている。しかし、高齢化率からもわかる通り、高齢者のみの世帯も多く生活管理が不十分で入退院を繰り返している患者が多い。高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう地域包括ケアシステムの構築を推進している¹⁾。そのため、心不全指導を確実に行うことで入退院を繰り返す患者が減るのではないかと考えた。しかし今回、心不全指導に関してスタッフにアンケートを実施したところ、心不全指導に対する意識の差が感じられた。そこでまずはスタッフの意識改革を行う必要があると考え取り組みを行った。

【方法】

対象：A病院B病棟看護師20名(研究委員と管理職を除く)

方法：①「心不全で入院された患者様へ」と題したアンケートを作成②既存の心不全指導パンフレットチェックリストの見直し③看護計画初期評価の日に合わせて初回入院患者にはパンフレットを渡し、2回目以降の入院患者には現在の理解度を確認④心不全で入院した患者と一目でわかるように、看護必要度記録監査の名前の横にハートマークのスタンプを押す⑤①～④の項目を1枚の紙にマニュアルとしてまとめ、看護必要度記録監査の紙と一緒にファイルにはさむ

【結果】

10月から取り組みを開始、12月にアンケートを行った。①心不全指導チェックリストを変更して使用しやすくなった(35%)変わらない(50%)使いにくい(0%)無回答(15%)②今回新たな取り組みを行って心不全指導に対する意識は変わった(80%)変わらない(5%)無回答(15%)③心不全指導を意識して行うようになった(55%)変わらない(25%)行えなかった(10%)無回答(10%)

【考察】

チェックリストに関しては、異動や入職してきたばかりで以前のものを使用したことがないという答えが多かったことや、実施期間が2ヶ月と短かったことが関係しているのではないかと考えられる。しかし、心不全指導に対する意識は変わったという答えが80%であり、今回の目的は達成できた。矢萩は「患者指導は患者だけでなく看護師も関係するものである。その指導の方法や内容が患者だけでなく看護師にも配慮されていることが重要である」と述べている²⁾。今まではいつ誰が誰(患者とその家族)にどのように指導を行うのかが明確ではなく、看護師が意識して行えるような分かりやすいものではなかった。しかし今回の取り組みにより、その部分が以前より明確となり個人個人の意識付けに繋がったのではないかと考えられる。PDCAサイクルを回しチェックリストを有効に活用出来ているかを評価し、改善し続けていくことが今後の課題である。

引用・参考文献

1) https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/

2) パンフレットを活用した患者指導の統一と個別性への配慮 矢萩匠 BRAIN

NURSING2015 vol.31